歴史教科書

徹底検証Q&A

何が問題か

小森陽一
坂本義和 編
安丸良夫

岩波書店

小森陽一（こもり よういち）

1953年生まれ．現在，東京大学教授．専攻＝日本近代文学．主著『構造としての語り』『ポストコロニアル』．

坂本義和（さかもと よしかず）

1927年生まれ．現在，東京大学名誉教授．専攻＝国際政治学．主著『地球時代の国際政治』『相対化の時代』．

安丸良夫（やすまる よしお）

1934年生まれ．現在，一橋大学名誉教授．専攻＝日本思想史．主著『日本の近代化と民衆思想』『近代天皇像の形成』．

歴史教科書 何が問題か―徹底検証Q＆A―

2001年6月25日　第1刷発行
2001年7月16日　第2刷発行

編　者　小森陽一・坂本義和・安丸良夫

発行者　大塚信一

発行所　株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
電　話　案内 03-5210-4000
http://www.iwanami.co.jp/

印刷 製本・法令印刷　カバー・半七印刷

© Yoichi Komori, Yoshikazu Sakamoto and Yoshio Yasumaru 2001
ISBN 4-00-002525-2　　Printed in Japan

〈日本複写権センター委託出版物〉本書の無断複写は，著作権法上での例外を除き，禁じられています．本書からの複写は，日本複写権センター（03-3401-2382）の許諾を得て下さい．

はじめに

「新しい歴史教科書をつくる会」主導の中学校歴史教科書（扶桑社刊）は、国内で、また国際的にも、きびしい批判を受けています。なぜでしょうか。

本来、教科書は、学界の研究成果をとり入れた手堅い学識と、行き届いた教育的配慮とに基づいて書かれるべきものです。

ところが、この教科書は、文部科学省がつけた一三七カ所の修正、それも些細な訂正ではなく、執筆者の歴史認識と抵触するような指摘をも含む検定意見を、「屈辱的だ」と言いながらも、ひたすら検定合格という目的達成のために全部呑む、という経過をたどって作成されました。そのことを見ても、執筆者の学問的な見識と誠実さが疑われるのです。

その上、文部科学省の検定意見は、学習指導要領という形で定められた、教科書としての最低限の基準を示しているようですが、この基準そのものにも問題があります。とくに、政府は、この教科書の歴史観は政府の見方と同じではないと弁明していますが、これを「教科書として適当である」と判断した、その判断基準が、実は問題なのです。

したがって、この扶桑社版には、なお多くの重要な問題が残されています。

では、この教科書の何が問題なのでしょうか。その点を、扶桑社版の内容に即して徹底的に検証するのが、この本

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の目的です。

そこで、まずⅠで、この本の基本的な視点を述べます。

次にⅡで、扶桑社版に書いてあることと、書いてないこととの、それぞれについて、根本的な問題点を検証します。

まず、書いてあることについては、Ⅱの1で、主に事実の誤りや記述の不的確さを指摘します。どのような政治的・思想的立場に立つ人であろうと、この誤りは認めざるをえず、したがって、こうした誤りがある本を教科書として使っていいのだろうかと、誰もが疑うような欠陥の指摘です。

書いてあることのもう一つの問題は、歴史の記述や解釈の歪曲です。そこで、現在の研究成果や学問的常識からして、いかにも無理な、意図的とも思われる歪めた記述を指摘します。

こうした歪曲の底には、最新の研究成果を無視あるいは軽視しても自分の歴史解釈を主張する、という姿勢があると思われます。ここでは、その基底にある歴史観を問題にする必要があります。

扶桑社版は、ある程度その歴史観を明示しており、それにはこの本で批判を加えますが、実際には、歴史観を暗黙の前提として、歴史記述をしている場合が少なくありません。そこで、Ⅱの後半2では、明示的に書いてない暗黙の歴史解釈が持つ問題点を摘出します。

また、書いてないことの中で見逃せない、もう一つの問題点として、扶桑社版だけでなく、ほかの出版社の教科書も抹殺した重要な事実があり、それもここで論じます。

とくに「従軍慰安婦」の記述の欠落に見られる問題については、Ⅲで、より広くジェンダーの視点からの教科書批判を提起します。

言うまでもなく歴史教科書は、過去の記憶を刻むだけでなく、次世代とともに私たち一人ひとりが未来を切りひら

いて行くための素材です。これは歴史家だけの課題ではありません。そこで終わりにⅣとⅤで、広く各分野の方々に、扶桑社版について、思うところを述べてもらいます。

扶桑社版を一読して明らかなことの一つは、これは日本の国家エリートの視点に立つ歴史叙述だということです。歴史の中での被支配者や、差別されたり侵略された人々の視点と行動には、きわめて小さな比重しか認めていません。

昨今、「歴史は物語だ」という言い方が流行っています。絶対に正しい唯一の歴史など存在しないことは確かですが、だからと言って、すべての「物語」が同じ平面に並んでいる訳ではありません。「物語」は、支配・被支配という権力関係に組み込まれており、扶桑社版は、国家の支配エリートの「物語」に焦点をすえています。

そのことは、この教科書の執筆者が、一九四五年の敗戦や、それに続く民主化と非軍事化を、〝まだ癒えない「傷痕」〟と呼ぶような見方につながっています。これは執筆者が、それ以前の旧体制の国家エリートの視点に立っていることを示しています。

しかし、もし執筆者が民主主義を否定するのでないならば、なぜ日本は自力で民主主義を確立できなかったのか、と率直に自問すべきなのです。なぜ、「外からの革命」なしに日本は民主化できなかったのか、はたして旧支配エリートが民主主義を「自主的に」選んだだろうか、旧日本軍や軍部の解体なしに、民主化ができただろうか。

それは他面で、国家エリートではなく民衆の歴史の中に、私たちが誇ることのできる民主化の萌芽がどのように生まれてきたか、そのルーツを探ることであり、また戦後の「外からの民主化」を土着化し、自分のものにするために、どのような下からの努力やたたかいが行われてきたかに着目することでもあるのです。下からの民主化のない民主主義などありえないからです。したがって、いま私たちに必要なのは、国家やその支配エリートの視点にしばられない、

民衆の歴史や社会史にまで深く掘り下げた教科書ではないでしょうか。

私たちは、外国からの批判があるから扶桑社版を問題にするのではありません。私たちが日々見聞しているように、二一世紀には、国家や民族の壁をこえた交流が急速にふえていくことは明らかです。この時代に、若い世代がアジアの一員、世界の一員として信頼され、自信をもって生きて行くためには、自国自賛をこえた歴史の認識と教育が、私たち自身にとって必要なのだと思います。

二〇〇一年六月

編　者

目次

はじめに ―― 編者 ―― v

Ⅰ 自国への誇りとは何か ―― 加藤周一 ―― 1

Ⅱ 徹底検証Q&A

1 事実の誤り、記述の問題点は何か ―― 11

古代史の問題点は何か ―― 李成市 ―― 12

中世史の問題点は何か ―― 山本幸司 ―― 23

近世史の問題点は何か ―― 深谷克己 ―― 28

中国観の問題点は何か ―― 溝口雄三 ―― 34

朝鮮観の問題点は何か ―― 高崎宗司 ―― 41

東南アジア観の問題点は何か ―― 後藤乾一 ―― 46

2 歴史教科書問題 その全体像を検証する ―― 小森陽一・安丸良夫監修 ―― 55

Ⅰ 歴史観の特質とは何か ―― 56

Q1 「新しい歴史教科書をつくる会」の中学校歴史教科書の内容について、その特徴をわかりやすく説明して下さい。

Q2 この教科書の特徴である自国中心史観にはどのような問題点があるのでしょうか。

Q3 戦争は、いつの時代、どこの国でもやっていることだから善悪で判断できないという主張には一理あるのではないでしょうか。

Q4 植民地支配は戦後問題になったことで、戦前にはすべての列強がやっていたのではないですか。

Q5 日本の戦争は、アジアの植民地を西欧から解放するためのものだったという考えをどう見たらよいのでしょうか。

Q6 神話や天皇、「教育勅語」が重視されているそうですが、実際にはどう書かれているのですか。

Q7 この教科書の特徴は、「皇国史観」の復活ということになるのでしょうか。

Q8 この教科書は、どうして国の過去に誇りをもちたい、とこんなにもこだわるのでしょうか。

Ⅱ 中学教科書としてふさわしいか ―― 95

Q9 この教科書は、人物を大切にしているので、子どもたちにもなじみやすいように思いますがいかがですか。

Q10 他の教科書で書かれているのに、この教科書に欠けている主題は何ですか。

Q11 この教科書は高校受験に向いた記述になっているでしょうか。

Q12 「従軍慰安婦」について、中学生に教えるのは、年齢的にまだ早いのではないかと思いますが、どうですか。
Q13 扶桑社以外の七社の教科書には問題はないのでしょうか。

Ⅲ 検定制度、採択をどう見るか ―― 121

Q14 「つくる会」の教科書が一三七カ所の修正によっても、全体として変わらなかったというのは本当ですか。
Q15 それほど悪い教科書なら、教師は採用しないと思うし現場で使わなければいいのではないですか。
Q16 検定制度とは、学問と表現の自由を奪うものではないでしょうか。また、検定制度があるから、韓国や中国から批判されるのではないですか。
Q17 中国や韓国から批判されるから、日本の教科書を書き換えなければならないというのはおかしいと思いますが。
Q18 自分の地域の採択に対して、教師として保護者として、どうしたらいいでしょうか。採択されてしまった場合はもう抵抗はできないのですか。

Ⅲ 女たちはどう描かれているか

〈対談〉 近代の女性・家族・ジェンダーをどう描いているのか ―― 加納実紀代・安丸良夫 ―― 146
儒教的家族国家観への逆行 ―― 若桑みどり ―― 156

Ⅳ ここから新しい人は育たない ―― 大江健三郎 ―― 163

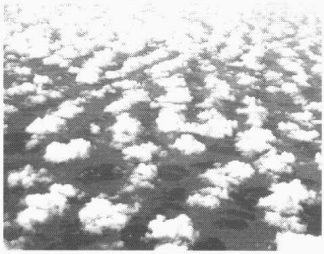
Ⅴ 私はこう思う

山崎朋子 186／平田オリザ 188／三好徹 190／宮崎哲弥 192／橋本治 194／高木敏子 196
比屋根照夫 198／日取真俊 200／趙景達 202／辻井喬 204／斎藤美奈子 206／原武史 208
大石芳野 210／入江昭 212

Ⅵ 資料

近現代史部分の誤りと問題点 ―― 荒井信一・和田春樹他 ―― 216
アジアからの反応 ―― 228

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



I 自国への誇りとは何か

加藤周一

自国の文化や歴史に誇りを持つことは、悪いことではありません。問題は、何をもって誇りの根拠とするか、です。

「つくる会」がこの教科書をつくった目的は、子どもたちが学校で歴史を学ぶことによって、自国に誇りがもてるようにしたいということですが、この目的自体は至極当然のことで、私は、どの国であれ、子どもは歴史を学ぶことによって自国の歴史や文化に誇りを持ったほうがよいと思います。問題は、その誇りとは何か、どのような誇りをもつか、ということです。

この教科書について、第一に言いたいのは、自国についての誇りの問題です。

いかなる国の歴史であっても、過去によいこともしたし悪いこともした。倫理的な面だけでなくて、たとえば経済などの面からいえば、成功したこともあれば失敗をしたこともあるはずです。全面的に悪かったり、全面的によかったりなんてことはありえない。全面的に成功した国や全面的に失敗した国など、ありえないでしょう。

では、自国に誇りをもてるような歴史の語り方とは何かといえば、ひとつは、よいことや成功したことだけを語ることです。もうひとつは、悪いことをしたり、失敗したことも自ら直視し、認め、反省することです。それは自己を批判する能力があるということですし、自分の失敗を認める勇気があるということですから、それはそれで誇りの根拠に立派になりうるものです。自国の歴史の悪い事実、失敗した事実を隠したり、ごまかしたり、言い逃れするというのは、むしろ見苦しいということになるでしょう。

それは大人だけでなくて、子どもも、まして中学生であれば十分に見抜けることだと思います。

歴史は空想ではありませんから、事実の尊重ということが第一です。そこでは学問的な厳しさが要求されるので、

まずどのような事実があったか、自分の解釈に都合のいいものばかりでなく、不都合な、あるいは反対するような事実もきちんと直視するということが、歴史を描く上での前提となります。

私は、日本は十分にいいことをしてきたし、また十分にいいものを作り出してきたと思います。わざわざ嘘をついたり誇張したり、ましてや威張ったりする必要はない。ただ事実を正確に描いていけば、そのよさというものは子どもたちに伝わると思うのですが、この教科書を読んでみると、その大きな特徴は、必要もないのにやたら威張っていることです。

たとえば、法隆寺の五重塔塑像は、仏の入滅に立ち会って号泣している羅漢の彫刻で、激しい感情を表現しています。小さなものですが、天平時代の傑作であり、世界的に見てもそうざらにあるものではないと私は思いますが、この教科書の「世界に類をみない」という記述の仕方には、ちょっと待てよ、と考えないわけにはゆきません。仏教の涅槃図なら、敦煌の壁画や彫像などのほか、羅漢の悲しみを表現しているのは世界にいくつもあります。また激しい感情表現ということでいえば、十字架から下ろされたキリストを抱くマリアの像、たとえば有名なミケランジェロの傑作もあれば、フランス中世の「アヴィニョンのピエタ」などたくさんあるのです。

「世界に類をみない」というのは誇張であり、その誇張は必要がない、余計なことです。これはまったくの一例ですが、美術だけでなく、あらゆる面でこうした余計な誇張がこの教科書には多すぎる。人間というものは自信のないときに、つい誇張したくなるもので、ほんとうに自信がある場合には、評価については読者にお任せする、という態度になるのが自然でしょう。

歴史のいいところばかり集めて見せるというのは、逆に説得力を失わせるものです。教育の目的は、子どもを引っ掛けたり騙すことではないでしょう。子どもだって、いいところばかり見せられれば、世の中にそんなことはないわ

けですから、その嘘を見破ると思います。静かに、客観的に、悪いところも含めて教える、それが説得力を増すし、ほんとうの意味での誇りを与えると思います。

明治維新の時代、圧倒的に強い武力をもっている外国に開国を迫られて、日本は開国しました。為政者はアヘン戦争などの結果も知っていたので、このままぼやぼやしていたら、日本も植民地にされてしまう、そうならないためには強い軍事力が必要だと考えた。そう考えること自体は、少なくとも馬鹿げたことではありません。ペリーの艦隊が江戸湾に入ってきたときは、相手は蒸気機関ももっている大きな船であり、日本側は手でこぐ小さな漁船だったのです。とても太刀打ちできない。ところが、それから五〇年後、明治維新から数えるとわずか三五年後ですが、対馬海峡で連合艦隊がロシアのバルチック艦隊と戦闘し、互角に渉り合うばかりか勝ったわけです。この短い期間に、漁船から近代的な艦隊をつくり(船自体は外国からも買ったのですが)、動かしたというのは、これはたいへんな成功といえると思います。

成功の定義は、目的を設定して、それを達成することであるとすれば、これは明らかに成功です。驚くべき大成功。あれだけの短期間にあれだけの規模で目標を達成したのは、おそらく日本だけではないかと思います。

ところが、日本の近代史は成功だけではないわけで、成功したあと、日本は軍事力に過剰な期待をするようになってしまう。次第に武力ですべてを解決できるという錯覚に陥っていきます。それがやがては軍事力過信になり、アジアにおいては、圧倒的な武力を備え何でもできるような慢心と妄想を抱いて、大陸に侵攻し、軍国主義となり、最後は無条件降伏で終わるわけです。これは破滅といっていいでしょう。明らかに大失敗です。

どこの国でも成功と失敗があるけれども、近代日本の場合は、抜きん出た成功と抜きん出た失敗がセットになっていることが特徴なのです。成功を書くならば、同時に失敗のほうも書かなければならない。この「つくる会」の教科

書は、どこか惜敗のようなニュアンスで敗戦を描いているけれども、誰が考えてもあれは大失敗です。

この教科書の著者たちは、自分の国の歴史と文化に対してもっと自信をもつべきでしょう。日本の歴史は、失敗をかくし、批判を和らげ、事実を曲げなければならないほど貧しいものではありません。どれほど批判しても素晴らしいものが残るのです。

さて、それにしても、なぜ歴史教科書がこれほどの問題になっているのでしょうか。

それは、歴史というものが、現在と密接にかかわるからです。ただ過去の問題で、それが現在と何も関係がないということならば、歴史教科書について、近隣諸国も、また私たちも、これほど問題にしたりはしないでしょう。

個人でも、保険会社はまずその人の過去の病歴を知ろうとします。その人の過去の病歴がわかれば、近い将来、どんな病気が出そうか、あるいは出そうでないかがある程度予測しうるからです。考えてみれば、人間が実際に使うことのできるデータとは、個人であれ、社会であれ、政府であれ、すべて過去のものなのです。

歴史をどう見ているかが、その人が現在どういう立場にあり、どういう考え方をしているかを知るための決定的なデータです。それを元にして未来を判断するしかない。周辺の諸国が、日本の歴史観を気にするのはその意味で当然なのです。

ほんとうの意味での鋭い歴史意識、誇りにすべき歴史意識というのは、自己批判以外にはありません。自己批判が冷静で、客観的で、勇気に満ちているということは、その個人、その社会の精神的、知的能力の高さの証拠です。それ以外にないといっていいほどの証拠です。だから自己批判の力こそが、誇りの根拠なのです。

自分のしたことについて、悪いことと認めなかったり、いつも弁解したりごまかそうとしているのは、個人であれ社会であれ、決して尊敬されないし、誇りももてないでしょう。この教科書の執筆者は、誇りをもつための方向を明

らかに間違えていると思います。

もう一つ申し上げたいことは、政府と教科書の関係です。

教科書が完全に私的なもので、それをつくるプロセスに政府が介入せず、またその学校での採択にも介入しないというならば、政府は教科書に関する責任をもたなくてもよいでしょう。中央政府ではなくて、地方政府が教科書に関与する国、たとえば米国やヨーロッパの多くの国では、地方政府がその教科書の責任を負うので、中央あるいは連邦政府に責任はありません。しかし日本のように、中央政府が検定制度によって関与し、教科書を公認するかたちをとるならば、当然、その責任は中央政府が負わなければなりません。

日本政府がこの教科書でよろしい、将来の日本人を育てるのにふさわしいと公認したのですから、そこに描かれた歴史意識と日本政府の歴史意識は密接不可分と考えていい。ことに日本の侵略の歴史に犠牲者・被害者として直接関係のあった、中国、韓国などが、これに反応するのは当たり前だと思います。教科書は内政問題というけれども、中に書かれていることは、内政だけではない。日本歴史は少なくとも東北アジアの中で動いてきたのであって、東北アジア史の一部です。内政と外政は絡んで展開してきたのです。

そこで形成される日本人の歴史意識が、将来東北アジアに大きく影響する可能性があるのですから、中国、韓国が重大な関心をもって当然です。内政干渉論ではすまない問題でしょう。

日本では北朝鮮の脅威とか中国の脅威とかいっていますが、立場を変えてみれば、この地域においては、日本の脅威(あるいは米国と組んでいますから日米の脅威)のほうがはるかに大きいでしょう。しかもかつて、日本は軍事力でことを起こしているのです。警戒されないほうがおかしい。問題の意味はこういうことなのだということを、もっと日本社会は理解すべきです。

さらに、日本側の抽象的な「国益」、つまり倫理的な要素をまったく除いて、日本の国際的な利益という観点からだけ見ても、この教科書の導入は、百害あって一利なし、日本の外交、国益にとって何のプラスにもならないでしょう。

政府はいま、検定は終了したから、もう修正できないなどと言っていますが、それはやる意思と勇気の問題だと思います。かつて、金大中氏が日本から拉致されたとき、日本政府はかなり無理をして「政治決着」をしたではありませんか。ああいうことができるのに、なぜ教科書では「政治決着」ができないのでしょうか。

そもそも歴史教科書を政府が検定し、公認するということは、歴史の解釈や理解の仕方について、権力が介入し、統制するということです。歴史意識というものがその社会の現在と将来のあり方に深く関わる以上、それは権力が社会の精神的、知的自由をコントロールすることにほかなりません。これは、民主主義に反する行為でしょう。それぞれの個人が、権力から自由に、その社会のあり方や方向について考えていけるということこそが、思想の自由であり、民主主義の原理です。またその自由を保障するために、言論の自由があり、メディアの役割があり、情報公開があるのでしょう。日本の未来に民主主義を期待するというならば(私は期待しますが)、こういう知的な自由への統制を止めさせることを、まず考えるべきだと私は思います(談)。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com